東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

島崎藤村「初恋」の教材的価値

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): Shimazaki Toson, The First Love, value of teaching materials 作成者: 陳, 知清 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173515

島崎藤村「初恋」の教材的価値

陳　　知　清*

島崎藤村「初恋」は1959（昭和34）年の高校の国語教科書（筑摩書房）に採録されてから、60余年の歴史になる。中学の教科書では、1980年代から定番化していき、今は盤石になっている。高校の教科書にも採録されていた時期があるが、90年代以降ほとんど使われなくなった。この詩の教材化の歴史が長いが、その教材的価値についての検討は管見の限りでは、先行研究が多いとはいえない。本論文は「初恋」の教材としての価値を検討することで、詩教材の意味を考えることを目的とする。

論文では、まず「初恋」の解釈を試みた。次に、中学・高校の教科書におけるこの詩の採録状況を分析した。続いて、この詩が1970年代半ば頃再び注目された理由について分析した。最後に、中学の国語教科書及びその指導書を考察して、この詩の教材的価値を検討してみた。文語定型詩の持つ美しいリズム感を味わわせることは、この詩の価値として一貫して重視されてきた。しかし、それは主に読解のための音読・朗読であった。2000（平成12）年以降の教科書の指導書では、表現のための音読・朗読が強調されるようになった。また、この詩にうたわれた初恋の感情を味わわせることはこの詩の価値の重要な一つである。「初恋」を学び、恋愛について考えさせることは、この詩が70年代半ば頃再び注目された大きな理由だと考えられる。最後に、この詩が日本近代の代表的抒情詩であることが採録の大きな理由の一つだと考えられるが、その文学史的価値の内実については時代によって変化が見られる。70年代の教科書の指導書では、「個」の解放について「初恋」の持つ大きな役割が強調されていたが、その後、強調の度合いが減じていった。2000（平成12）年以降、伝統的な言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることが一層重視されるようになり、「初恋」は近代詩の中の古典として継承にふさわしい作品だと広く認識されるようになっていったといえる。

Key words

島崎藤村、「初恋」、教材的価値

*東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科